

コスモポリタニズムの条件

——ナショナリズムとグローバリズムのあいだをどう捉えるか——

ルイス・エスパルザ 野宮大志郎
藤田泰昌 片野洋平
竹中 健 龍野洋介

目次

1. はじめに
2. コスモポリタニズム
3. 研究方法
4. 分析結果
5. 結論

1. はじめに

経済グローバル化は、今日、世界の構造に大きな変化をもたらしている (Lyotard 1984=1989; Beck 2000; Vertovec 2000)。このことは、20世紀後半、国家間の交易と通商の領域で起きた一連の動きに起因する。この時期、西欧先進諸国は貿易を通して途上国や貧困国を経済交流の輪の中に取り込もうと、新自由主義的な経済政策を推し進めた。その過程で、世界貿易機構 (WTO) と国際通貨基金 (IMF) は、そうした経済政策の実質的な推進機関となる。一方、これに対して新自由主義経済政策に反対する途上国国家と市民団体を巻き込んだ反対運動が世界各国で起きようになる (野宮ほか 2015)。

2003年、メキシコ、カンクンでの WTO 閣僚会議は、このような世界的な大きなうねりの中で

開催された。この会議では、新自由主義経済政策を推し進める G8 諸国と、それに抵抗する国家連合すなわち G22 として後に知られる途上国との間での衝突が起こっている。その結果、何ら実質的な進展をみることのなかった会議として、後世に名を残すことになる。

会議では、農業政策をめぐる亀裂が生じた。1970年代後半から90年代にかけて、多くの発展途上国が国家財政の危機を経験した。そうした国々は、経済危機から脱出するため西欧先進諸国に助けを求めた。西欧先進諸国は経済援助をおこない、それと引き換えに、途上国に対して「構造調整政策 (Structural Adjustment Policy)」を受け入れるように求める。この構造調整政策は、それを受け入れた国々に対して保護主義的な経済政策を取ることを抑制する政策である。

他方、日本や米国など先進諸国は、この間ずっと保護貿易的な政策を取り続けている。すなわち、国家による庇護のもと、それぞれの農産物を維持・発展させるという政策を取っていた。このままでは、先進諸国と G22 諸国は公平な競争ができない。このことがカンクンの WTO 閣僚会議で大きく取り上げられた (Esparza 2009)。

2003年のWTO関係会議では、新自由主義経済政策に反対する大規模な社会運動が起こった。そうした社会運動が会議場の外からG8諸国に圧力をかけたこともあって、途上国連合は新たな提案の策定へと向かうことになる。WTO関係会議が開催されているさなかに、キューバの通商大臣は群衆に向かって以下のように語りかけている。

現行の世界経済・社会秩序はもはや持続可能ではなくなっている。支援することもできない。今日の我々の体制を大きく変えつつ、現実的な解決策を見出していかなければならない。…(中略)…我々の最も崇高な原理のひとつは、国際連帯と国際支援である。

この発言の後、他の21の国々は、キューバとともに経済ブロックをつくりあげ、G8諸国と対決する姿勢を明確に打ち出した。ボリビアの通産大臣カルロス・ブルーノは以下のように述べている。

我々は単に連帯や正義について話しているのではない。我々は基本的には、国際経済システムの未来について話しているのである。

また、米国と同盟関係にあるコロンビアの通産大臣でさえ、次のように述べている。

我々は、経済的に最も豊かな国々がより大きな責任を負うべきであると主張する。また、そういう時期に来たことを確信している。この判断に立つことで、我々はより公正で平等なシステムを創りあげることができよう。さらに、グローバルなレベルで起こるさまざまな問題の原因について、議論することができるようになる。

こうした途上国グループの戦術は、グローバル・ジャスティス運動にヒントを得たものだった。こ

れらの国家によるコスモポリタンなレトリックは、国家利益にもとづいて発現しているというだけでなく、それらの国民国家に深く根付いた価値観そのものの帰結でもある。

2. コスモポリタニズム

2003年のWTO関係会議では、「国民国家のコスモポリタニズム」とでも呼ぶべきものが見られた。このコスモポリタニズムは、国家の利害と価値が組み合わさった結果である。グローバリゼーションとは、量的には新しいシステムへの変化、また質的には新たな自己認識の形成と、そのプロセスの中で高まるグローバル連携の意識という側面を有している。したがって、そうした2つの自己認識は、グローバル経済サミットという器の中で融合することになる。

コスモポリタニズムとは、環境、社会、経済、政治かつ文化的諸要因にもとづき、国家が相互に依存し合うシステムが存在するというパラダイムである。コスモポリタニズムにおいて、さまざまな要因が混在するシステムが機能するためのベストな方法は、相互協力や相互利益を通してグローバルな課題を解決することであると。それは単に人道的な目的ではなく、自己の利益の追求のためでもある。

リアリズムの理論では、国民国家は国家の利益を他の利益よりも優先的に扱おうとする。コスモポリタニズムでは、グローバルな領域においてある種のコスモポリタンな考え方をもつ国民国家が存在すると主張する。コスモポリタニズム的傾向を持つ国家である場合、コスモポリタニズムを表明することこそが、リアリスト的な意味で国家利益につながる。国家利益であるコスモポリタニズムは、国家の構造的要因と文化的要因、また利益と価値によって制約を受ける。

歴史学の領域では、コスモポリタニズムを体現する国家の存在が確認されている。サミ・ズバディアは、中東で原理主義が台頭する以前のオスマン